

# 明治末期から大正期におけるミシン裁縫教育

## —シンガーミシン裁縫女学院の教育活動と実物教材の検討—

池田 仁美

[指導教員：武庫川女子大学教授 森田 雅子 / 横川 公子（～2015）]

キーワード：シンガーミシン裁縫女学院，ミシン裁縫教育，明治，洋服型紙製図，洋装化

### 1. はじめに

日本におけるミシンの受容は、幕末からの衣服の変遷及び洋装化の進展と相関をもって進んできた。1906（明治39）年に東京に設立されたシンガーミシン裁縫女学院は、日本で最初にミシン裁縫に特化した教育をおこなった私立学校である。同院は、シンガーミシン社によるミシンの販売と連動した裁縫教育を展開したことから、明治末期から大正期のミシンの普及と洋裁教育に影響を及ぼしたと思われる。しかし、学校史などの編纂もなく、通時的にその活動が把握できるようなまとまった資料は残っていない。

本研究は、初期のシンガーミシン裁縫女学院の実物教材資料から得た知見をもとに、同院が明治末期に構築したミシン裁縫教育の活動とその展開から、近現代へ通じる洋裁教育史の一端を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究背景

日本に始めてミシンが渡来したのは 1860（万延元）年である。1872（明治 5）年には鉄道員服及び礼服の制定、1874（明治 7）年には教員の洋服が制定された。さらに、1877（明治 10）年 2 月の西南戦争勃発に伴う軍服の需要から、ミシンによる軍服の大量生産が始まった。1886（明治 19）年、陸軍被服本廠が創立され、1894～1895（明治 27～28）年の日清戦争時の戦役により、被服並びにミシンの技術の進歩向上が著しく進んだという<sup>1)</sup>。

米国シンガーミシン社は、1900（明治 33）年、日本国内でミシンの販売を開始した。本論の研究対象となるシンガーミシン裁縫女学院は、1906（明治 39）年に東京市麹町区有楽町に女子を対象にミシン裁縫の指導を行う学校として文部省の認可を受け、設立された。当時の日本の女性は殆どが和服を着用しており、洋服を着用すること自体が珍しかった時代である。シンガーミシン社は、日本でのミシン販売を進めるにあたって、洋服を普及させ、ミシン裁縫を人々に認知させるための教育機関を必要としていた。シンガーミシン裁縫女学院は、同院の設立認可に関する公文書<sup>2)</sup>の記述により、シンガーミシン社株東支配人である秦敏之個人が私財を投じて設立したことが読み取れる。同院の院長はその妻である利舞子が務め、日本におけるシンガーミシンを使用した裁縫の普及活動は、秦夫妻によって始動した。

“シンガーミシン裁縫女学院の設立”という事実自体は、日本ミシン協会編『日本ミシン産業史』<sup>3)</sup>、中山千代『日本婦人洋装史』<sup>4)</sup>などの、ミシン産業の発展や日本の洋装化の

歴史を辿る文献においても特記すべき出来事として登場する。しかし、シンガーミシン裁縫女学院の活動概要とその変遷について先行調査を行なったところ、同院の学校史などは編纂されておらず、設立から衰退、廃校に至る迄を通時的にまとめた資料は存在しないことがわかった。

ミシンが日本の近代化とともに歩んだ経緯については、アンドルー・ゴードンが『ミシンと日本の近代 消費者の創出』<sup>4)</sup>で、ミシンの普及が衣服をめぐる消費生活を変容させ、女性の社会進出にもつながった点について経済・社会史の視点から指摘している。また、岩本真一は、『ミシンと衣服の経済史 地球規模経済と家内生産』<sup>5)</sup>で、ミシンを生産財と捉え、工場内生産と家内生産の双方でのミシン利用と近代日本衣服産業の展開について考察をしている。日本の近代化に、「ミシン」という一つの視点を置く研究手法は近年に見られる傾向であるが、経済学の視点では、実際にミシンをどのように利用して、洋服裁縫教育がなされていたのかまでは触れていない。家政学の視点ではミシンと衣服の関わりについて、尾仲明代<sup>6)9)</sup>、小泉和子<sup>10)</sup>らが洋服裁縫教育に関する報告をしている。尾仲は江戸から明治期、小泉は大正から昭和期の洋装文化の発展と共に、そこに関わった洋裁教育に目を向け、時代の要求に応じて変遷を遂げた洋服の製作に関する背景を時系列的に整理し、各時代の洋裁教育の特色について述べた。両者は、日本の洋装化の進展にミシンによる縫製が関連していたことは指摘している。しかし、具体的なミシン裁縫教育の内容と、洋服の縫製方法については言及していない。

シンガーミシン裁縫女学院に関する先行研究としては、これまでに山本、佐伯、横川<sup>11)</sup>や横川<sup>12)</sup>が、シンガーミシン裁縫女学院の実物の授業教材資料による調査を進めてきた。実物教材資料は、同院の初期の卒業生であった山口ツルが在学中に作成したものである。ツルの遺族によって元武庫川女子大学生活環境学科横川公子研究室に寄贈され、同研究室の調査によって、衣服型紙製図、授業ノート、衣服雛形、袋物標本、袋物型紙で構成される資料群であることが判明した。山本ら<sup>11)</sup>は衣服雛形を中心に資料の整理を行い、シンガーミシン裁縫女学院では衣服雛形の製作による洋服裁縫指導法が行われていたことを明らかにした。また、横川<sup>12)</sup>は袋物標本及び袋物型紙の教材資料の整理を進めると共に、実物教材資料の製作者である山口ツルの周辺調査をおこない、袋物の製作を明治時代の女性の技芸修業の具体的な事例として報告している。本研究では、これらの実物資料調査を筆者が引き継ぎ、未検討の授業教材資料である衣服型紙製図及び授業

ノートの整理・分析をおこなうと同時に、シンガーミシン裁縫女学院における洋服製図法の割出し理論についても言及した。同院は、現在に通じる洋裁教育の黎明期にあつて、今日に影響を及ぼしてきたものと思われる。本研究では、シンガーミシン裁縫女学院におけるミシン裁縫の教育活動実態を明らかにすることにより、同院が新たに構築した指導教程や、教材の内容を具体的に捉え、明治末期から大正期における同院のミシン裁縫教育の実態を明らかにした。

### 3. 明治期のミシン裁縫教育

明治期にミシンが日本に伝来したことをきっかけに始まったミシン裁縫教育と洋裁教育であるが、ミシン裁縫教育自体は、1906（明治 39）年のシンガーミシン裁縫女学院の設立以前においてもおこなわれた例があり、洋裁の指導の際にミシンを使用していた。

教育の場合は、その規模や学校の形態によって、三種類に分類することができる。一つは、「女子ミシン速成学会」、「洋式日本裁縫学校」のように、数ヶ月単位の短期間で学ぶ専門教育学校である。二つ目は、現在の家政学系大学の前身となった学校である。1874（明治 7）年に設置された「東京女子師範学校」（現お茶の水女子大学）、1892（明治 25）年に渡辺辰五郎によって設立された「東京裁縫女学校」（現東京家政大学）などが挙げられる。三つ目は、小規模な研究会や夏期講習で、ホワイトミシン会社による「ホワイトミシン裁縫研究会」などである。

「東京裁縫女学校」の設立者・渡辺辰五郎は、雛形製作を伴う裁縫の一斉教授法を確立し、明治前半期における裁縫教育界の先覚者である。渡辺辰五郎は、1881～1886（明治 14～19）年の期間、「東京女子師範学校」においても裁縫科の教員をつとめており、渡辺式の裁縫教育をおこなっていた。『裁縫教科書』<sup>13)</sup>の記述には、「シャツの縫い方」にミシンによる縫製方法の説明がある。ただし、手縫いに完全に代わるものではなく、飾りミシンとしての用途も含まれる。あくまで手縫いを主とし、一部にミシン裁縫を取り入れた裁縫教育である。渡辺辰五郎による雛形製作の教材資料は、現在、重要有形民俗文化財「渡辺学園裁縫雛形コレクション」として東京家政大学博物館に収蔵されている。同コレクションの民俗文化財調査票<sup>14)</sup>からは、明治 30（1897）年に製作された洋服雛形教材の一部に、ミシンによる縫製が確認できた。同コレクションの雛形の縫製方法は、手縫いとミシン縫いが混在していたことから、「東京裁縫女学校」では、手縫いによる裁縫指導からミシン裁縫に完全に移行した訳ではないことがわかる。また、渡辺辰五郎の長男の渡辺滋は、米国留学後の明治 35（1902）年から同校で米国式の洋裁教育を開始したが、『裁縫科講演集』<sup>15)</sup>の記述から、ミシンの使用は必須の縫製方法としては捉えていなかったようである。

一方、シンガーミシン裁縫女学院は、ミシン裁縫の指導を中心に行うことを目的とした点が特徴的である。設立期のシンガーミシン裁縫女学院は、ミシンの操作技術を身につけ、

洋服裁縫やミシン刺繍に応用する指導の必要性から、他の裁縫教育機関とは異なる特色を持ったものであることが推測できる。

明治期のミシン裁縫教育の出現には次の理由が読み取れた。1 つ目は、洋装化と並行して需要が生まれた洋裁教育に付随して、その縫製に必要な機械としての導入、2 つ目は、従来の手縫いによる縫製からの移行、3 つ目は、ミシンの販売会社が自社のミシンの使用法を指導する目的である。さらに、1904（明治 37）年には、ミシン裁縫を女性の職業として従事者を募集する新聞広告<sup>16)</sup>が出現し、日清・日露戦争による軍用被服の縫製の需要もあいまって、ミシン裁縫教育は、ミシン縫製技術の必要性から波及したものであったと言える。

### 4. シンガーミシン社の販売活動

シンガーミシン社はミシン販売にあたって東京、大阪、長崎、名古屋をはじめとし、全国に分店を設置した。その数は、1906（明治 39）年には 60 店以上<sup>17)</sup>、1908（明治 41）年には 150 店以上<sup>18)</sup>に及んだ。

1906（明治 39 年）、シンガーミシンの販売価格は、広告によると一台が 48 円から 143 円であった<sup>19)</sup>。小学校教師の月額給与が 13～25 円であった<sup>20)</sup>ことから、ミシンの価格は月給の 2～6 ヶ月分に相当するもので、一般家庭で簡単に購入できる物ではなかったことがわかる。そこで、シンガーミシン社は、日本初のミシンの月賦販売をおこない、ミシンの購入をやすくし、家庭婦人へのミシンの普及を加速させた。ただし、広告に掲載された月額の割賦払金は 5 円であったから、月賦支払いとはいえ、誰でも簡単に購入が可能なほど安価なものではなかった。

全国の分店には、販売員と女教師、集金人を置いた。販売員は各家庭を訪問して、月賦での支払いでミシンを販売した。女教師は、ミシン購入者の家庭を分割代金の集金の都度訪問し、無料でミシン裁縫の指導をおこなった。シンガーミシン社によるミシン購入者への特典は、女教師の無料出張教授以外にも、シンガーミシン裁縫女学院の学費の免除があり、同社は未知の機械の操作技術習得についても保証していたと言える。女教師を務めたのは、シンガーミシン裁縫女学院の卒業生である。『婦女新聞』の広告には、無料出張教授の指導内容と教材が明記してあり<sup>22)</sup>、その記述から、シンガーミシン裁縫女学院の指導内容に準ずる指導がおこなわれていた事がわかった。

シンガーミシン社の極東支配人・秦敏之は、新聞広告を活用した販売戦略を展開していた。このことから、シンガーミシンの販売広告の宣伝文句や挿絵は、ミシンの所有を啓蒙する効果があったと思われる。『朝日新聞』、『読売新聞』、『婦女新聞』を主な資料とし、シンガーミシンの販売広告を抽出すると、ミシンの需要を喚起させるような宣伝文句や、使用用途を具体的にイメージさせる挿絵が含まれており、当時の女性に「ミシンは良いものである」という意識を植え付ける効果があったと思われる。宣伝文句には、ミシンの「試用・

無料教授」，ミシンの使用による時間と労力の「節約」，ミシンのイメージ向上を図る「最上等」，という表現が目立ち，縫う機械としての実用的な需要だけではなく，それ以上に所有すること自体がステイタスシンボルとなるような販売戦略があったことが示唆された。また，シンガーミシン裁縫女学院の生徒像には，ミシンの所持によって経済的にも精神的にもより良い家庭生活を求めた女性が浮かび上がった<sup>23)</sup>。

## 5. シンガーミシン裁縫女学院の活動状況

ミシンを家庭に取り入れることは，日々の裁縫の効率化だけでなく，ミシン裁縫の技術が女性の内職として自活の手段や，洋裁指導の女教師となる道が開けることを意味する。秦利舞子は，シンガーミシン裁縫女学院の生徒の通学動機には，婦人のたしなみ，家計の補助のためや，職業訓練として学ぶ未亡人などを挙げている<sup>24)</sup>。また，『国民新聞』によると同院の開校式には，中流以上の夫人や令嬢が見られ，中には上流婦人もいたという<sup>25)</sup>。生徒は，経済状況や修業目的は異なるが，手縫いから機械裁縫への変化を受容しようとする，先駆的な女性達であったといえよう。女教師となった卒業生が，同院にて学んだ指導内容をミシンの販売数に相当する数の生徒に踏襲していたとすれば，洋裁教育史上においてその規模は無視することはできない。

シンガーミシン裁縫女学院の活動概要について，新聞や雑誌，公文書史料，学校規則資料等を元に，個々の情報を収集し，設立から衰退までの活動実態を通時的に再構築することを試みた。調査対象とした主な新聞・雑誌は，『読売新聞』『朝日新聞』，『婦女新聞』，『婦人画報』，『婦人週報』で，これらの資料は，掲載時期が特定でき，時代に即した情報が得られるものである。

これらの新聞及び雑誌の広告や記事を整理すると，シンガーミシン裁縫女学院が名を変えながら，三期に分けられる活動をおこなっていたことが読み取れた。第一期は1906（明治39）年～1910（明治43）年の「シンガーミシン裁縫女学院」，第二期は1912（大正元）年頃～1915（大正4）年の「シンガー裁縫刺繍院」，第三期は1916（大正5）年～1933（昭和8）年の「シンガー裁縫院」である。

第一期の「シンガーミシン裁縫女学院」は，秦敏之・利舞子夫妻の運営によるものであったが，シンガーミシン社との教育・経営に関する考えの相違により，1910（明治43）年12月末をもって閉院した<sup>26)</sup>。第二期は，ミシン刺繍を主に指導する教育機関として，『読売新聞』の「婦人の職業」に紹介されたが<sup>27)</sup>，調査対象とした新聞・雑誌上には生徒募集広告の掲載もなく，活動実態は明確でない。第三期は，シンガーミシン社の横浜支店の支配人であるリチャード・マックリアリーが設立者となった<sup>28)</sup>。主事は宗田寛がつとめ，シンガーミシン社の経営による学校となっていた。第三期「シンガー裁縫院」は，1933（昭和8）年に在校生の不在による経営難を理由に閉院したことが，公文書「シンガー裁縫院廃校願」<sup>29)</sup>に記されている。

第一期は，5年間という短期間であったが，ミシン裁縫の教育課程を立ち上げ，私立学校としての運営基盤を整備した時期にあたる。1907（明治40）年3月の学則<sup>30)</sup>によると，第一期は，普通科3ヶ月・高等科3ヶ月・研究科5ヶ月・修業年限のない随意科の4科で運営を開始した。同年9月の学則<sup>31)</sup>では，2年課程の家政部を新たに設置し，ミシン刺繍の指導も開始した。家政部は，指導科目内容から文検の受験を視野に入れて教員養成に特化した教育をおこなっていたことが読み取れる。家政部の設置は，シンガーミシンの販売促進活動とは異なる目的を持った教育の場を構築しようとした意図が示唆される。1910（明治43）年には，和服部が追加され，シンガーミシン裁縫女学院の定員は1000人となった<sup>32)</sup>。

新聞及び雑誌の記述による教材内容を整理すると，普通科から研究科まで段階的に難易度を上げながらミシン裁縫技術を身につける教程が組まれていたことがわかる。1906（明治39）年の指導教材を例に挙げると，普通科では洋装下着類，シャツ類，ズボン下類，子供服類など，比較的簡単に縫え，日常生活で使用するような消耗品とも言える衣服が挙げられている。製図は，和服裁縫と同様に布にしるしを入れ，裁断する方式である<sup>23)</sup>。一方，高等科，研究科は製図式によるとあり，背広や礼服，婦人洋装を教材とし，型紙の製図を伴う指導がおこなわれていたことがわかる<sup>23)</sup>。「私立学校学則改正之件」<sup>31)</sup>によると，普通科が終わるまでは，すべて実物の製作による練習をおこなったと記されている。あえて“実物”という表現が用いられたのは，実物よりも小さい雛形製作による教授と区別するためであったと思われる。なお，第一期の教材の名称の一部は，渡辺辰五郎の「東京裁縫女学校」で製作された雛形の名称と共通するものを含んでいることから，シンガーミシン裁縫女学院との関連が示唆された。

シンガーミシン裁縫女学院には，1921（大正10）年に，現在の文化学園大学の創立者である遠藤政次郎と並木伊三郎が，第三期の「シンガー裁縫院」に洋服科を設け，そこから二人が独立して「文化裁縫学院」を設立した経緯がある<sup>33)</sup>。文化式の洋裁教育は現代にも続いており，洋裁を主体とした学校組織の設立期において，シンガーミシン裁縫女学院が関与していたことは，洋裁教育史上においてもミシン裁縫と洋裁教育の関係が密接であったことを示す史実であろう。

## 6. 秦利舞子が目指したミシン裁縫教育

シンガーミシン裁縫女学院の初代院長を務めた秦利舞子は，当時，ミシン教育学校を立ち上げた婦人実業家として注目され，ミシンによる洋裁教育と，女性の自活に関する考えを新聞や雑誌で公にする機会に恵まれた。利舞子は，和裁へのミシン裁縫の導入を試みると共に，ミシン刺繍を米国から取り入れ，独自に指導を開始した。ミシン刺繍は，和服の半襟や帯にも施すことができたことから，ミシンの用途は着用する機会の多くない洋服裁縫からミシン刺繍へと移行していった。利舞子は，『みしん裁縫ひとりまなび』<sup>34)</sup>，『みしん刺繍独学』<sup>35)</sup>，『改訂増補ミシン裁縫独学ビ』<sup>36)</sup>の著書があり，シ

ンガーミシン裁縫女学院の第一期の指導内容を示唆するものである。『みしん裁縫ひとりまなび』の洋服の製図（裁断図を兼ねる）は、和服裁縫を彷彿させるような直線による平面的な構成が特徴である。製図を簡便にすることで、“ミシンで縫う”作業に重きをおいたことが読み取れる。同書中の利舞子の製図の特徴は、利舞子の母校である「東京女子高等師範学校」でおこなわれていた渡辺式の指導にも共通して見られるものであり、両者の指導の関連が読み取れる。

『みしん裁縫ひとりまなび』の内容は、シンガーミシン裁縫女学院のミシン裁縫普通科の規則による内容と連動し、大部分が子供用の洋服や下着で、その他は成人男子用の內衣と、成人女子用の家事服であった。利舞子は、自宅のミシンで縫製することにより、労力と金銭面での節約が見込まれると述べており、大人服よりも洋装化が先行した子供服にミシンによる裁縫の利点を見出していたと思われる。また、利舞子は、ミシンを用いて自宅で丁寧を作るものは質が高く丈夫なため、子供服に最適であるとし、独自に工夫して製作すること自体にも価値を見出していた。利舞子は、女性が裁縫の技術を身につけることで家庭内の衣服の裁縫の労力を省くと共に、自活を可能にして地位向上につなげ、より豊かな生活を送ることを目指していたと考えられる。

## 7. シンガーミシン裁縫女学院の実物教材資料群の調査

本項では、最初期のシンガーミシン裁縫女学院に学んだ山口ツルが、授業で実際に製作した実物の教材資料群から指導内容を明らかにし、ミシン裁縫教育の黎明期における指導の実態を捉えることを目的として調査をおこなった。

ツルは1908（明治41）年9月から翌年12月までシンガーミシン裁縫女学院に在籍し、ミシン裁縫の普通科・高等科・師範科で学んだ人物である。ツルの遺品である教材資料群は、元横川公子研究室で保管されており、本研究の調査のために参照させて頂いた。教材資料群のうち、山本ら<sup>11)</sup>及び横川<sup>12)</sup>による先行研究によって調査・整理の済んだ衣服雛形や袋物関連の教材以外の資料は、型紙製図と「授業ノート」である。資料中にツルによって記入されたメモを元に分類したところ、型紙製図は66点54種、「授業ノート」は33点25種の教材からなることが判明した。型紙製図は、バストサイズの違いを元に、先行調査に連携して「男子服」「女子服」「男児服」「女児服」「嬰兒服」といった年齢、性別での分類や、「上衣」「下衣」という形状の分類をおこなった。

ツルの型紙の製図は、秦利舞子の『みしん裁縫ひとりまなび』の平面構成の製図とは異なり、曲線で構成された立体構成の製図である。衣服の上下方向は用紙の下辺と平行にとり、身長と胸囲による割出式の製図で、単位は吋（インチ）が用いられている。製図の要所には、身長と胸囲による割出式が記入してあり、割出式によって描かれた基礎線を元に、輪郭線がかかわれている。図面中には、教員の評価がかかれており、矢野又は井上の検印があった。これらの製図の特徴を捉え、製図手順の再現を試みた<sup>37)</sup>。また、製図に含まれる割出式

の算出理論について、考察をおこなった。

割出式の算出理論について、同時期の国内の裁縫書の製図と比較したが、どれも符合するものはなかった。さらに調査を進めた結果、米国のC.J.ストーン<sup>38-39)</sup>の著書に記載された製図に酷似していることが判明した。実物教材資料群の製図のうち、ストーン<sup>38-39)</sup>の著書の製図とほぼ一致するものは29点で、初期のシンガーミシン裁縫女学院における洋裁指導は米国式のものであったことが明らかとなった。

「授業ノート」には型紙配置図や縫い方手順が記録されており、型紙を裁断時にタックやギャザー一分を入れて展開する方法や、縫い代寸法なども把握できる。これらは、縫製再現を可能にする貴重な情報源であると言える。また、「授業ノート」の一部に、『みしん裁縫ひとりまなび』と酷似した裁断図があったことから、最初期のシンガーミシン裁縫女学院では、米国式の洋裁教育と秦利舞子による渡辺式の特徴を持つ裁縫教育の両方がおこなわれていたことがわかった。

## 8. シンガーミシン裁縫女学院とミシン裁縫教育の系譜

以上の調査結果を元に、シンガーミシン裁縫女学院がおこなったミシン裁縫教育についてまとめ、同院の設立から衰退までのミシン裁縫教育の系譜を作成した（図1）。

1906（明治39）年から1910（明治43）年までのシンガーミシン裁縫女学院の教育内容は、女子高等師範学校で渡辺辰五郎による渡辺式の裁縫教育を受けた秦利舞子が、その製図方法を取り入れながら、さらに独自にミシンを用いた縫製方法を考案したものであった。この裁合せ図による平面構成の製図は、初心者向けにミシン裁縫普通科の指導に用いられた。米国式の割出し製図理論による製図教育を主体とし、婦人洋装や礼服にまで及ぶ洋裁教育は、ミシン裁縫高等科・研究科でおこなわれた。高等科・研究科の指導を担当したのは、高等科・研究科の教材として分類できる実物教材資料群に「矢野」の検印を残した矢野元子であったと思われる。矢野は『東京裁縫女学校一覧』<sup>40)</sup>の卒業者名簿に名前があり、『みしん裁縫ひとりまなび』の序文にもシンガーミシン裁縫女学院の首席教師として同書の編纂に関わった人物として挙げられている。したがって、シンガーミシン裁縫女学院でおこなわれた米国式の製図による洋裁教育は、シンガーミシン社が米国から持ち込んだ物ではなく、ストーン裁断学校で学んだ渡辺滋が「東京裁縫女学校」に持ち込み、そこで洋裁指導に使用した製図法を学んだ矢野によってシンガーミシン裁縫女学院が取り入れたという流れが浮かび上がった。

シンガーミシン裁縫女学院は、ミシン刺繍についても、日本で最初にミシン刺繍を取り入れた教育機関として、新たなミシン刺繍文化を確立したと言える。一方で、シンガーミシン裁縫女学院では、裁縫科教員の養成の場として、高等女学校に準ずる指導も展開していた。女性がミシンを活用して自活する道として、ミシンの購入者への指導や、ミシンによる洋裁、ミシン刺繍による内職、裁縫科教員といった進路を想定したものであったことがわかった。最初期のシンガーミシ

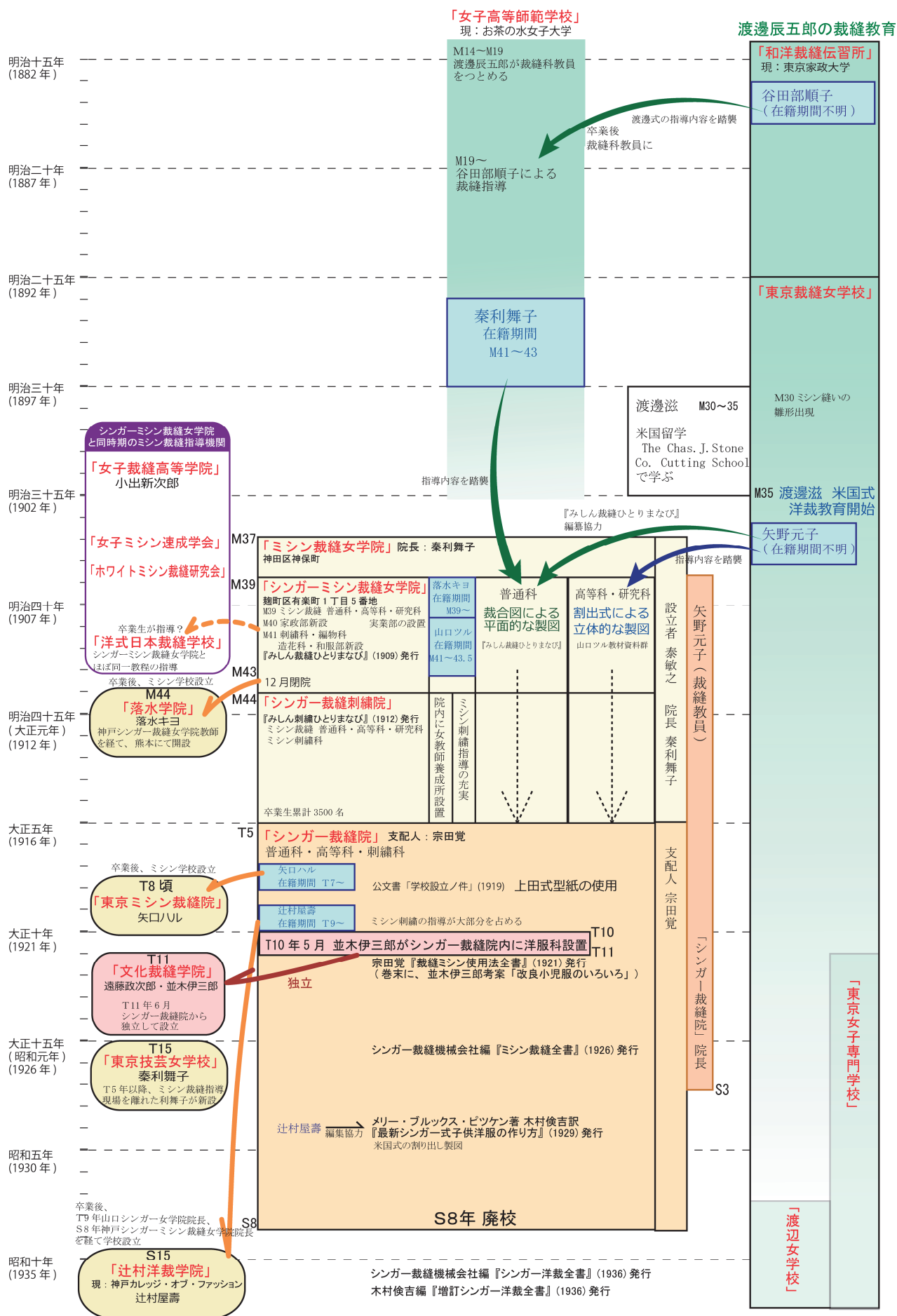


図1 シンガーミシン裁縫女学院と裁縫教育の系譜（筆者作成）

ン裁縫女学院は、女子教育に主眼をおいたミシン裁縫の指導により、結果的にシンガーミシン社の販売促進活動に貢献したことになるが、その背景には、秦利舞子による女子の地位向上に対する信念と、独自に立ち上げたミシンを活用した裁縫及び刺繍の教育の展開があったと言える。

1916（大正 5）年以降、学校の名称は「シンガー裁縫院」となり、経営主体はシンガーミシン社に移る。同社の社内機関として、指導者を養成する言わばミシンの「教習所」という性格を強めていた。大沼<sup>33)</sup>によると、1921（大正 10）年には、洋裁教育よりもミシン刺繍の指導を中心におこなっていたという。1921（大正 10）年に、文化裁縫女学校の設立者である並木伊三郎を講師とする洋服科が約 1 年間設置されたことにより、再びミシンによる洋服裁縫の指導がおこなわれ、現在の文化学園に通じる洋裁教育の源流となった。シンガーミシン裁縫女学院の設立は、大正中期頃から婦人・子供服を中心とした洋裁学校が相次いで設立された時期の前段階にあって、言い替えれば、洋装の普及以前の段階において、ミシンの使用の意義を模索し続けた学校であったと言える。

## 9. おわりに

シンガーミシン裁縫女学院のミシン裁縫教育の位置づけを川の流れと例えるならば、源流に渡辺辰五郎が考案した裁縫教育法がある。渡辺滋による米国のストーン式洋裁教育の流れがそこに加わり、渡辺式の裁縫教育を受けた秦利舞子が考案したミシンによる縫製を主とした洋裁教育とミシン刺繍の教育が合流し、さらに太い流れとなる。その流れは、同院の卒業生によるシンガーミシンの購入者への無料指導と、卒業生が設立した裁縫学校を通じ、支流のように全国へ広がった。同院で昭和期まで続いたミシン裁縫教育の本流には、並木伊三郎による洋裁教育が合流し、現在の文化学園大学・文化服装学院に通じる洋裁教育の大河となったと言えるのである。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご指導ご鞭撻を賜りました森田雅子教授、平成 21～26 年度までに貴重な実物資料を閲覧させて下さると共にご指導ご鞭撻を頂きました横川公子名誉教授、大切な遺品を寄贈して下さいました山口ツルさんのご遺族に心より感謝申し上げます。

## 注及び参考文献

- 1) 日本ミシン協会編：ミシン産業史，日本ミシン協会，463-465，1961
- 2) 私立学校設立認可案：東京都公文書館所蔵，1-7-3，1906.9.16
- 3) 中山千代：日本婦人洋装史，吉川弘文館，1987
- 4) アンドルー・ゴードン：ミシンと日本の近代 消費者の創出，大島かおり訳，みすず書房，2013
- 5) 岩本真一：ミシンと衣服の経済史 地球規模経済と家内生産，思文閣出版，2014
- 6) 尾仲明代：黎明期の洋装とミシンについて（第一報），東京家政大学研究紀要，5，41-50，1965
- 7) 尾仲明代：黎明期の洋装とミシンについて（第二報），東京家政大学研究紀要，6，21-28，1966
- 8) 尾仲明代：黎明期の洋装とミシンについて（第 3 報），東京家政大学研究紀要，7，55-64，1967
- 9) 尾仲明代：黎明期の洋装とミシンについて（第 4 報），明治の女子教育と裁縫教育，東京家政大学研究紀要，11，1-10，1971-03
- 10) 小泉和子：洋裁の時代 日本人の衣服革命，OM 出版，2004
- 11) 山本裕香，佐伯智子，横川公子：シンガーミシン洋裁講習会の衣服雛形について—山口津留氏製作の寄贈雛形—，武庫川女子大紀要，人文・社会科学編，44，121-128，1996
- 12) 横川公子：明治期における一女性の技芸修業—故山口ツル氏の遺品，袋物標本とその型紙を通して—，武庫川女子大紀要（人文・社会科学），57，135-146，2009
- 13) 渡辺辰五郎編：裁縫教科書，2 巻，東京裁縫女学校，44，1897
- 14) 東京家政大学博物館編：渡辺学園裁縫雛形コレクション，上巻・下巻，東京家政大学博物館，2001
- 15) 渡辺滋：裁縫科講演集，東京裁縫女学校出版部，105，1917
- 16) 読売新聞：明治 37 年 5 月 30 日朝刊
- 17) 婦女新聞：明治 39 年 8 月 6 日
- 18) 読売新聞：明治 41 年 7 月 10 日朝刊
- 19) 婦女新聞：明治 40 年 4 月 29 日
- 20) 中央新聞：大正元年 12 月 3 日
- 21) 朝日新聞：明治 40 年 4 月 20 日朝刊
- 22) 婦女新聞：明治 40 年 10 月 2 日
- 23) 池田仁美：メディアに見るシンガーミシン裁縫女学院の沿革とミシン裁縫教育，意匠学会誌デザイン理論，66，3-16，2015
- 24) 秦利舞子：女子の新職業シンガーミシン裁縫，婦人くらぶ，紫明社，1(3)，81-86，1908
- 25) 国民新聞：明治 39 年 10 月 22 日
- 26) 朝日新聞：明治 43 年 9 月 9 日朝刊
- 27) 読売新聞：大正 4 年 2 月 14 日朝刊
- 28) 学校設立ノ件：東京都公文書館，2-15-1，1919.9.23
- 29) 学校廃止の件：東京都公文書館，1933.6.27
- 30) 学則：明治 40 年 3 月シンガーミシン裁縫女学院，筆者蔵
- 31) 私立学校学則改正之件：東京都公文書館，1-7-4，1907.09.30
- 32) 今井翠巖：最近調査東京女子遊学案内，博文館，309-326，1910
- 33) 大沼淳：文化服装学院 40 年のあゆみ，文化服装学院，1963
- 34) 秦利舞子：みしん裁縫ひとりまなび，シンガーミシン裁縫女学院実業部，1909
- 35) 秦利舞子：みしん刺繍独学，日本実業商会，1912
- 36) 秦利舞子：改訂増補ミシン裁縫独学ビ，秦商店出版部，1924
- 37) 池田仁美，横川公子：初期のシンガーミシン裁縫女学院における洋服型紙，生活環境学研究，1，22-39，2013
- 38) Stone, Charles John.: Stone's new superlative coat and vest system, Chicago, The C. J. Stone co. cutting school, 1900
- 39) Stone, Charles John.: New superlative system of cutting ladies' garments, Chicago, The Chas. J. Stone co. cutting school, 1901
- 40) 渡辺滋編：東京裁縫女学校一覧，東京裁縫女学校出版部，1909